氏　　名	森本　大作
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第 6356　号
学位授与の日付	2021 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Head circumference in infants with nonopiate-induced neonatal abstinence syndrome （非オピオイドによる新生児薬物離脱症候群における新生児頭囲）
論文審査委員	教授 千堂年昭　　教授 淺沼幹人　　准教授 秋山倫之

学位論文内容の要旨

近年、海外において、母体オピオイド服用による新生児薬物離脱症候群の増加が問題となっている。このことと新生児頭囲縮小との関連性については報告されているが、非オピオイド薬に関しても同様の結果になることが、本研究においてはじめて示された。

本研究は、当院で分娩・出生に至った精神疾患の母体およびその児の 159 ペアを対象にした後向き観察研究で、過去 10 年間にわたって調査した。催眠鎮静薬、抗うつ薬、抗精神病薬、抗てんかん薬の各薬剤使用の有無とその他の背景要因を収集して、薬物離脱症候群発症群と非発症群に分けて比較検討を行った。結果は、約 21%の児が薬物離脱症候群を発症し、長期入院を要した（9 日 vs 5 日, $p<0.001$）。薬物離脱症候群発症群の児の方が出生時頭囲が有意に小さく（33.0cm vs 33.5cm, $p=0.034$）、また、在胎期間で補正した Z スコアでも同じ結果であった（-0.20 vs 0.29, $p=0.011$）。母親が抗精神病薬、抗うつ薬を服用していた場合、薬物離脱症候群の発症が有意に多かった（それぞれ、aOR 5.83, 95%CI 2.15-17.09, aOR 5.55, 95%CI 1.76-18.36）。

頭囲の発育は脳容積に関連するため、このような児への長期フォローアップの重要性を示唆する結果であると考えられた。

論文審査結果の要旨

母体オピオイド服用による新生児薬物離脱症候群について、新生児頭囲縮小との関連性が指摘されている。

本研究では、岡山大学病院で分娩・出生に至った精神疾患の母体およびその児の 159 ペアを対象とした後向き観察研究で、過去 10 年間にわたって調査した。催眠鎮静薬、抗うつ薬、抗精神病薬、抗てんかん薬の使用の有無について薬物離脱症候群の発症群と非発症群に分けて比較検討した。その結果、約 21%の児が薬物離脱症候群を発症し、出生児頭囲が有意に小さく、母親が抗精神病薬、抗うつ薬を服用していた場合に発症が有意に多いことが示された。

本研究は、非オピオイド薬で新生児薬物離脱症候群を引き起こし、それによって新生児の頭囲が縮小することを初めて明らかにし、このような児への長期フォローアップの重要性について、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。